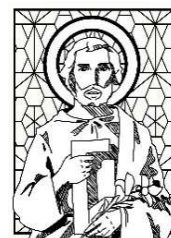




ともに歩む



労働者聖ヨセフ

土崎教会の保護聖人

4号 2025年10月1日 カトリック土崎教会
発行者：篠崎 エジルソン c.tsuchizaki@gmail.com

～神様と、共同体と、日々の暮らしの中で～

【実りと食欲の秋と感謝の祭儀】

私はブラジルのサンパウロ出身で、日本のように四季をはっきり感じることはあまりありませんでした。日本に来てから、春夏秋冬の移り変わりを強く意識するようになり、とりわけ暑がりの私にとっては、涼しく心地よい秋が最高の季節となりました。景色もまた美しく、特別な味わいをもっています。そして何より「食欲の秋」。おいしい食べ物に恵まれるこの季節を思うとき、自然とキリスト者としての「食」の中心、すなわちミサにおいて主の体をいただくことを思い起こします。

ミサは「言葉の祭儀」と「感謝の祭儀」の二つに分かれています。最初にみことばを通して神に養われ、その後が続くのが感謝の祭儀です。ここでパンとぶどう酒が祭壇にささげられ、司祭は次の

ように祈ります。「神よ、あなたは万物の造り主、ここに供えるパンは、あなたからいただいたもの。大地の恵み、労働の実り、わたしたちのいのちの糧となるものです。」会衆は「神よ、あなたは万物の造り主」と応えます。同じように、ぶどう酒についても「救いの杯となるものです」と祈り、会衆が応えます。

この祈りは、ユダヤ教の伝統的な食卓の祈り（ベラカー）に由来し、すべてのものが神から与えられていることを告白するものです。パンは「大地の実り」、ぶどう酒は「ぶどうの実の収穫」と呼ばれますが、その背後には詩編24編の「地とそこに満ちるものは主のもの」という言葉があります。聖アウグスティヌスは「パンもぶどう酒も、自然と人の労働の結晶である。だからそれを神にささげるとき、私たち自身の生活も共にささげられる」と語りました。

ここで言う「私たち自身の生活も共にささげられる」とは、単に農作物やぶどう酒の原料を意味するものではありません。私たちの日常の労働や家庭での時間、喜びも悲しみもすべて、祭壇に運ばれるパンとぶどう酒の中に象徴されているのです。たとえば、農夫が汗を流して育てた稲、母親が家族のために作る一杯の味噌汁、学生が学びに励む日々、病床で祈りをささげる信徒の忍耐、これらは一見異なる営みですが、すべてが神にささげることのできる「生活の実り」です。

だからこそ、ミサにおいてパンとぶどう酒が奉納されるとき、私たちはただの物質をささげているのではなく、自分の一週間の歩み、働き、家族や友人との関わり、時には葛藤や試練までも含めて、神に差し出しているのです。そして神はそれらを受け取り、キリストのいのちに結びつけ、新しい恵みとして私たちに返してください。

秋の実りに感謝するように、私たちの生活のすべてを神にゆだねるとき、ミサは単なる儀式ではなく、人生全体を神に結び付ける場となります。感謝の祭儀にあずかることで、私たちは「日常をささげ、恵みを受け取る」信仰の歩

みを新たにします。この秋、豊かな食卓を囲みながら、私たち自身の生活もまた神への感謝の供え物であることを思い起こし、共に生きる喜びを深めてまいりましょう。

【なぜ私たちは教皇の意向のために祈るのか？】

毎月、教皇は「祈りの意向」を発表し、世界中の信者に祈りを呼びかけています。その内容は、戦争や貧困、環境、家庭、若者、教会の使命など、現代において特に重要な課題を示すものです。私たちはこの祈りを通して、普遍教会の一致の中に加えられ、全世界の兄弟姉妹と心を合わせることができます。

「なぜ教皇の意向のために祈るのか」と問われるとき、まず思い出すべきは、教皇がペトロの後継者として全教会を導く使命を担っているということです。教皇は全世界の人々の声を聞き、苦しむ人々や見過ごされがちな問題に光を当てます。だからこそ、その意向に応えて祈ることは、単にローマにいる一人の指導者を支えることではなく、教会全体を支えることに通じるのです。祈りは目に見える力ではありませんが、教

父たちは「祈りは世界を支える柱」と語ってきました。祈りによって私たちは自分の小さな枠を越え、遠い国や会ったことのない人々の苦しみや希望を担うことができます。たとえば、戦火に苦しむ人々のため、信仰を守り抜こうとする共同体のため、また環境破壊を止める努力をしている人々のために祈るとき、私たちは彼らと霊的に結ばれ、神の前で共に立つのです。

また、教皇の意向のために祈ることは、私たちの信仰を広げる機会でもあります。家族や地域のことだけでなく、地球規模の課題に目を向けるとき、祈りは「世界への連帯」へと変わります。小さな共同体の祈りが、全世界の祈りの鎖の一部となり、平和の力となるのです。

だからこそ、毎月の祈りの意向を心に留め、共同体のミサや個人の祈りの中で唱えることは、私たちが教会の一員として生きる大切な務めです。教皇の意向のために祈るとき、私たちは「教会全体の心臓の鼓動」に合わせて生きることになるのです。

以下は 10 月から 12 月までの教皇の意向です。

10 月 教皇の意向：さまざまな宗教

的伝統間の協力

さまざまな宗教的伝統を信じる人々が、平和、正義、人類の友愛を擁護し促進するために、互いに協力することができますように。

11 月 教皇の意向：自殺防止

自殺の誘惑にさらされている人々が、地域社会での必要な支援やケアを受け、愛に触れて、人生の美しさに心を開くことができますように。

12 月 教皇の意向：紛争地域のキリスト者

戦争や紛争が起きている地域、特に中東で暮らすキリスト者が、平和、和解、希望の種となることができますように。

【ロザリオの祈りの起源】

10 月は「ロザリオの月」と呼ばれています。ロザリオ(バラの冠)の祈りは、カトリック教会で古くから親しまれ、世界中の信者に愛されています。その起源は、修道士たちが毎日詩編を唱える聖務日課にまで遡ります。一般信徒が詩編を暗唱するのは困難だったため、代わりに「主の祈り」や「アヴェ・マリア」を繰り返して唱える習慣が生まれ、祈りの数を数える道具として小石や結び

目のある縄が使われ、やがて数珠（ロザリオ）が誕生しました。

12 世紀末から 13 世紀初頭、特に南フランスで異端とされたカタリ派との戦いの中、ドミニコ会の創設者聖ドミニコが聖母マリアからロザリオを授けられたという伝承が生まれました。実際に「アヴェ・マリアの祈り」と「主の祈り」を組み合わせ、イエス・キリストの生涯を黙想する祈りがドミニコ会を中心に普及し、現在のロザリオの形へと発展していきました。

ロザリオの祈りが世界的に広まるきっかけとなったのが、1571 年のレパントの海戦です。キリスト教諸国連合艦隊がイスラム勢力オスマン帝国に対して勝利を収めた際、教皇ピオ 5 世は信徒たちにロザリオを唱えるよう呼びかけました。その勝利は聖母マリアの取り次ぎによるものと考えられ、教皇は 10 月 7 日を「ロザリオの聖母」の祝日と制定しました。この日付を由来にして、10 月はロザリオの月とされています。

現代のロザリオは「喜び」「苦しみ」「栄え」に加え、2002 年にヨハネ・パウロ 2 世教皇が「光」の神秘を新たに加え、信者はイエスの生涯をマリアと共に黙想し、福音の中心に立ち返る祈り

へと導かれます。ロザリオの珠を指でなぞりながら祈るそのリズムは、心を静め、神に心に向ける道となります。

ロザリオの祈りの中心はキリストです。ロザリオはマリアへの祈りの形式を持ちながらも、「イエス・キリストの生涯とその救いの神秘」を福音の視点から黙想する「キリスト中心」の祈りです。マリアは祈りを通して信者をキリストへ導く役割を担い、すべての神秘の核心は「主キリスト」の出来事です。教皇ヨハネ・パウロ 2 世も「ロザリオは完全にキリスト中心の祈りである」と指摘しています。私たちはロザリオの珠を通して、マリアとともに主を仰ぎ、その愛と救いの歩みを深く観想します。

ロザリオは今でも個人、家庭、共同体で大切にされ、特に平和実現や困難な時代に希望の鎖となって人々の心を結びます。起源を辿ることで、この祈りが教会の歴史と信仰を支え続けていることに改めて気づかされます。

